日本政府観光局が「2024年度MICEアンバサダーの集い」を開催

～総勢64名が国際会議開催地としての日本のプレゼンス向上に活動～

日本政府観光局は（JNTO)、10月1日（火）、東京大神宮マツヤサロンで「2024年度MICEアンバサダーの集い」を開催した。

開会に登壇したJNTOの蒲生篤実 理事長は、「新たに3名の就任をいただき、12年目を迎える今年度は64名のMICEアンバサダーに日本の魅力を世界に発信していただいている」とアンバサダーの理解と協力に謝意を述べた。

開会挨拶：日本政府観光局（JNTO）理事長
蒲生 篤実 氏

蒲生理事長は5月に発表されたICCA統計をもとに、「2023年に世界で開催された国際会議件数はコロナ禍前の8割弱まで回復。日本は前年の12位から世界7位と大きく順位を上げ、2030年までに世界5位という成果目標に着実に近づいている。また、アジア太平洋地域では日本は韓国、オーストラリア、中国などを大きく引き離し首位を維持。さらに同地域の都市別でも、東京、京都をはじめ日本国内から15都市が70位以内にランクインしている」と報告。「これらの成果は皆様のご尽力とご協力の賜物であり、今後も国際会議の誘致に向けてお力添えいただきたい。またJNTOも、コンベンションビューローなどステークホルダーと連携し、主催者を中心としたオールジャパンの一員としてしっかりと協力していく」と挨拶した。

来賓を代表して登壇した観光庁の中野岳史 国際観光部長は、昨年5月に策定された「新時代のインバウンド拡大アクションプラン」に触れ、「2030年までに国際会議の開催件数を世界５位以内にするという目標を達成するべく、予算を大幅に拡充してMICEの誘致開催の促進に取組んでいる」と会場を鼓舞。

さらに国際会議の学術振興等の意義に触れ、「この一年間、文科省と連携して新たな取組みを進めてきた。今年度から新規事業として大学における国際会

来賓挨拶：観光庁 国際観光部長 中野 岳史 氏

議誘致開催促進事業を開始し、次世代の国際会議主催者の育成やコンベンションビューローと大学の連携強化など、より長期的な視点で国際会議の誘致開催の促進に取組んでいる」と挨拶した。

続いて登壇したJNTO MICE プロモーション部の巽麻里子部長は、MICEアンバサダープログラムについてその活動を紹介。

冒頭、自己紹介を兼ね観光庁への出向時に主担当を務め、日本で国際会議を開催する重要性についての国民理解を得たいと議論を重ねる中で誕生したプロジェクトの一つがMICEアンバサダープログラムだったと振り返り、「国際会議は誘致・開催して終わりではな

アンバサダー活動紹介：日本政府観光局（JNTO）
MICEプロモーション部長 巽 麻里子 氏

く、その経験やさまざまな分野に影響力を持つご知見を活かし広報大使としてご活躍いただくことで国際会議誘致開催のその意義、そして学術分野の重要性を関連する分野、さらに次の世代の若い方々にも波及していくことができる点が認められた事業」と続けた。

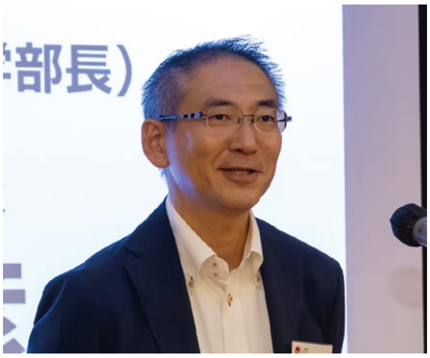
発足当初の7名から、今年は岐阜県から初のアンバサダーが誕生し64名へ拡大したMICEアンバサダー。その活躍をICCAやJNTOの統計をもとに紹介する中で、大都市、特に大学で開催される国際会議の把握が課題とした。続いてアンバサダーが関与し誘致に成功した会議（2023年4月から13件）、開催された会議（同21件）一覧を示し、JNTOのサポートメニューを活用した会議事例を紹介。

このほか国内向けプロモーション活動では、国際会議にフォーカスし子どもも楽しめる非常に楽しい30分の特別番組を作成。BSテレ東で9月に放映（11月に再放送、その後YouTubeにアップ）されたこと、さらに30秒のCM作成を報告した。

続いて、新たに任命された3名のアンバサダーが紹介された。

新任アンバサダー：日本学術会議 会長／
（独）大学改革支援・学位授与機構 理事 三石 衛 氏
生産工学、ロボット工学を専門とし、最先端ロボット技術を応用した手術支援ロボットを開発。日本学術会議では、毎年、学術研究団体が主催する国内開催の国際会議を共同主催する学術研究団体への支援・協力を行っている。

新任アンバサダー：浜松医科大 産婦人科
主任教授 伊東 宏晃 氏　2027年に浜松にて
第14回国際DOHaD学会開催予定



新任アンバサダー：岐阜大学 工学部 機械工学科
教授・工学部長 植松 美彦 氏
2023年に広島にて疲労に関する国際会議
（Fatique2022+1）を開催

不可抗力に阻まれ
3度目のチャレンジで
アジア初開催を実現

最後に、今回は家正則アンバサダーを講師に迎え講演「三度目の正直となった国際光工学会『天体望遠鏡と観測装置』横浜大会」が行われた。

講演講師：家 正則アンバサダー
（国立天文台 名誉教授／日本学士院会員／総合研究大学院 名誉教授／国際光工学会 フェロー）

国際光工学会（SPIE：The International Society for Optical Engineering）が開催する天体望遠鏡と観測装置に関する唯一・最大の国際会議をアジア初となる日本開催に導いたストーリーだ。

家アンバサダーは国際光工学会に1990年代より参加し、「観測装置分科会長」を20年間務めている。

SPIEは、1970年代より2年ごとに北米と欧州で交互に開催されてきた。これに対し、2008年のマルセイユ大会で全体組織委員長を勤めた家アンバサダーが米欧亜の三極開催サイクルを提唱し、2012年の日本開催提案が満場一致で決定した。この背景には、日本が1990年代に9年がかりでハワイに設置したすばる望遠鏡の活躍と日米欧で建設中だったALMA望遠鏡への期待があった。これらが世界の天文学に大きな役割を果たし、日本が北米、欧米に並ぶ地位を確立していた。

しかし2009年にはリーマンショックが勃発。さらに当時は円高で欧米からの参加者減の懸念が高まり、SPIE本部からの懇請を受け日本開催を断念せざるを得なかった。

その後、家アンバサダーが再度全体組織委員長を務めた2016年のエジンバラ大会で、2020年の日本開催を再決定。この2016年、家氏がMICEアンバサダーに選任され、JNTOのサポートを得ながら準備が進められたが、新型コロナウイルス感染症に阻まれ開催3ヵ月前にして再度中止を決断した。

SPIEからも、不可抗力により2度も実現できなかった日本開催をぜひとも実現したいと申し出があり、2024年、3度目のチャレンジとなるアジア初の日本開催が2020年に決定。今年6月15日～21日にパシフィコ横浜で開催された大会は、12の分科会に42ヵ国から2,900名の参加者（海外からが8割）を得て、ここ20年の中で最大規模となった。

今大会では、一般市民向けに『宇宙科学・天文学の最前線』と題した無料公開講演会を実施。YouTubeで生配信した翌日には1万人、昨日確認したところ20万人の視聴があったという。また開発関係の若手のキャリアアップにつなげようと発表論文の顕彰を実施され、JNTOのアイディアで日本ならでは賞盾が用意された。

一方、天文台や研究所へのバスツアーを企画したがバスの運転手不足により断念したほか、若手の旅費支援もさまざまな制約の中で実現ができなかったことなど、実行委員長として日本誘致、開催準備、実施状況の概要について披露された。